

2023 年度 茨城キリスト教大学 FD 報告書

授業改善委員会
(2024 年度)

2024 年 4 月 日

学長 東海林 宏司 殿
副学長 池内 耕作 殿
文学研究科長 David C. Yoshiba 殿
生活科学研究科長 石川 祐一 殿
看護学研究科長 松永 恵 殿
文学部長 岩間信之 殿
生活科学部長 山中 俊克 殿
看護学部長 栗原 加代 殿
経営学部長 米岡 英治 殿
未来教養学環長 佐々木隆宏 殿

授業改善委員会 2022・2023 年度委員長
生活科学部心理福祉学科 櫻井 由美子

平素より、授業改善委員会活動にご理解とご尽力賜り感謝申し上げます。本学「授業改善委員会規程」第3条の4)により、2023年度に行われました授業改善活動について以下のとおりご報告いたします。

全学 FD・全学教養課程センターFD

日 時：2023 年 9 月 12 日（火）13:15～14:15

方 法：ハイブリッド形式

（対面参加の会場： 8 号館 8101 教室）

参加者：専任教員 63 名・兼任講師 1 名

テーマ：対話型 AI を授業でどのように利用するか

2023 年度 授業改善委員会全学教養課程センター 全学 FD

対話型 AI を授業で どのように利用するか

日時：2023 年 9 月 12 日（火）13:15～14:15
場所：8 号館 8101 教室
方法：ハイブリッド形式（対面・オンライン） 詳細は 2C 室 IPA に掲示

ChatGPT や Google Bard などの対話型 AI アシスタントが気軽に使えるようになりました。これを大学教育の中で、どのように使えるかについて考えてみましょう。

1つは、教員が授業をよりよくするために対話型 AI をどのように利用することができるかについて、もう1つは、学生が自分の学習を進めるために対話型 AI をどのように利用することができるかについて、みんなで考えてみたいと思います。

講師 向後 千春 先生

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学部教授 博士(教育学)
専門は教育工学、教育心理学、アドラー心理学、教授法、
生涯学習、インストラクショナルデザイン、e-learning に造詣が
深い。特に、インストラクショナルデザインにおいて第一線の研究
者であり、論文・著書多数。



1. 実施目的と概要：

大学教育におけるデジタル教材の本格的導入を控え、IT 機器を用いた授業に関する研修機会として、昨年に引き続き、向後千春教授（早稲田大学）をお招きして、授業改善委員会・全学教養課程センター共催の全学 FD を実施した。研修テーマは「対話型 AI を授業でどのように利用するか」であった。具体的には、ChatGPT の授業における効果的利用法や課題について向後先生にご講義いただき、さらに、ご講義を踏まえて、グルーディスカッションを行った。

2. 研修内容：

本 FD では、向後先生の授業実践と実演を踏まえて、ChatGPT の教育における利用方法についてご講義いただいた。まず、ChatGPT を教員が利用する場合について、授業内容の検討や学生の課題評価への活用が可能であることとその具体的方法をご教示いただいた。また、学生が利用する場合については、学習課題に関する情報を収集したり、自分の文章を添削させたりするなど、学生による主体的な活用のあり方について解説していただいた。さらに、学生の ChatGPT の不正利用を防止するヒントについてもご教示いただいた。

近年、生成 AI の利用者数は急激に増加している。その精度は向上するとともに、利用場面も拡大の一途をたどっている。このような現状において、教育の質を担保し、学生の動向を理解するうえで、ChatGPT を理解することは欠かせないであろう。本 FD は、まさにこうしたニーズに即した内容を持つものであったと考えられる。

報告：櫻井 由美子（授業改善委員会）

文学研究科

文学研究科では、茨城県の英語教育に資することを目的に、特別公開講座（Special Lecture Series: SLS）を 2017 年度より実施しています。第 6 回目の 2023 年度は、茨城大学君塚淳一教授と本学菅野弘久教授による講座：「英語文学の世界」を実施しました。この特別公開講座は、研究科の FD を兼ねたものとなっています。

コロナ禍が一定の収まりを見せていること、コンテンツの著作権配慮からオンライン公開が困難であることにより、オンラインではなく対面での実施となりました。

講座は 2 日間にわたって実施されました。

2 月 10 日（土）「アメリカとアメリカ文学」（君塚教授）

Lecture A1: 10:20-11:50「アメリカ文学と映画そして英語教育」	11 名申込
Lecture A2: 12:40-14:10「アメリカ文学と音楽そして英語教育」	9 名申込
Lecture A3: 14:20-15:50「アメリカ文学と多民族そして英語教育」	10 名申込

2月24日（土）「蜷川幸雄のシェイクスピア」（菅野教授）

Lecture B1: 10:20-11:50「蜷川幸雄のドラマツルギー」 6名申込

Lecture B2: 12:40-14:10「《NINAGAWA マクベス》（1980/2015）」 7名申込

Lecture B3: 14:20-15:50「《NINAGAWA 十二夜》（2005）」 4名申込

両教授の講義ともに大変充実したものでした。君塚教授の講義は、豊富な資料に基づき、アメリカの文学や文化の受容の歴史に触れつつ、英語教育との関わりにも言及したものでした。菅野教授の講義は、イギリスの古典的戯曲であるシェイクスピアの作品が、蜷川の手により日本にどのように受容されていったかを、時代背景と関連させて解きほぐしていくものでした。

本来「公開講座」の性格を持つSLSではありますが、本学の教員にとってのFD（Faculty Development）の機会を兼ね備えたものと位置付け、教員の参加を促しました。また、今年度修了の文学研究科大学院生にも参加を呼びかけました。結果、現代英語学科教員は11名全員、いずれかの講座を受講し、3名は全講座の参加となりました。大学院生1名も全講座参加でした。しかしながら、学外からの参加者はゼロという結果になってしまいました。対面のみの講座であったこと、公報が本学ウェブサイトに限られていたこと、特に2日目は世間的には3連休の谷間であったことなどが原因と考えられます。講座内容が大変充実したものであり、質疑応答も活発であったこともあり、参加者が少なかったことだけが残念でした。FDの観点からは、自らの教育や研究のあり方を見直すきっかけにもなった等の感想が寄せられ、各教員にとって有意義な機会であったと総括できます。

報告：東海林 宏司（現代英語学科）

文学部

【現代英語学科】

1. 前期（6月-7月）

題目：授業見学・評価・フィードバック

参加：現代英語学科教員10名（上野学長をのぞく）——100%参加

概要：前期開講について現代英語学科専任教員が相互に授業見学を行い、当該の教員間において個人的にフィードバックと建設的批判を目的とする意見交換を行った。

2. 後期（2月）

題目：特別公開講座「英語文学の世界」

内容：「アメリカとアメリカ文学」

A1：アメリカ文学と映画そして英語教育

A2：アメリカ文学と音楽そして英語教育

A3：アメリカ文学と他民族そして英語教育

「蜷川幸雄のシェイクスピア」

B1：蜷川幸雄のドラマトゥルギー

B2：《NINAGAWA マクベス》（1980/2015）

B3：《NINAGAWA 十二夜》（2005）

講師：君塚淳一（茨城大学教授）、菅野弘久（本学教授）

日時：2023 年 2 月 10 日（土）・24 日（土） 10:20～15:50

場所：11 号館 206 教室

参加：現代英語学科教員 10 名（上野学長をのぞく）——100%参加

概要：大学院文学研究科の特別公開講座（Special Lecture Series）と重ねる形で、文学（文化）研究と英語教育について幅広く考える FD 活動となった。講義は、アメリカ文学とイギリス文学にわけて、それぞれ三つのセッションで構成された。君塚教授は〈映画〉、〈音楽〉、〈他民族〉の視点を媒介として〈アメリカ文学〉と〈英語教育〉を結びつける可能性について、J・D・サリンジャー、ジョン・チーバー、トルーマン・カポーティ、バーナード・マラマッドなどの作家・作品をもとに、その時代背景を含めて具体的に論じられた。菅野は、日本のシェイクスピア受容のひとつとして、世界的演出家・蜷川幸雄による代表的な演出作品——サムライ／仏壇マクベスとして知られる伝説的な《NINAGAWA マクベス》と歌舞伎翻案による《NINAGAWA 十二夜》——について、詳細な資料をもとに映像の視聴も交えながら紹介・解説した。

報告：菅野弘久（現代英語学科）

【児童教育学科】（専任教員 24 名）

基礎演習への新たな挑戦—「教育基礎演習 B」の成果と課題—

【FD の概要】

- ・ 日時：2024 年 1 月 30 日（火） 15 時 15 分～16 時 45 分
- ・ 場所：大学 1 号館 1201 教室
- ・ 形式：対面&オンラインのハイブリッド形式
- ・ 参加者： 23 名（対面参加 20 名（他学科 4 名含む）、オンライン参加 3 名）

【趣旨】

児童教育学科では、2022 年度のカリキュラム改定にともない、今年度（2023 年度）より、2 年次の「基礎演習（教育基礎演習 B）」が新たにスタートした。児童教育専攻と幼児保育専攻の教員たちが協同でつくりあげた、オムニバス形式の「教育基礎演習 B」に関して、そ

の目的や方法、学びの成果を示すとともに、今後の課題について議論を行うこととした。

【プログラム】

- ・ 開会のことば（池内文学部長）
- ・ 第1部：「教育基礎演習 B」の目的と方法
 - カリキュラム上の位置づけ（高橋専攻主任）
 - 授業の目的と方法（三橋）
 - 授業内容の一部の紹介（清水・小幡・穂積・江尻）
- ・ 第2部：「教育基礎演習 B」の成果と今後の課題
 - 学生の学びの実際と課題（三橋）
 - 質疑応答・全体討論（全体）

【内容】

- ・ 今年度スタートした、児童教育専攻と幼児保育専攻の教員によるオムニバス形式の「教育基礎演習 B」に関して、1）我々教員がどのような目的のもとに、いかなる授業を行ったのか、2）学生の学びの成果はどうであったか、3）今後に向けてどのような課題が残ったのかについて、具体的なデータ（学生の提出物や教員アンケートの結果）をもとに示した。以上をふまえ、4）今回の授業実践を通して見出された課題を今後どう解決していくのかについて話し合われた。
- ・ 具体的には、まずは「教育基礎演習 B」のカリキュラム上の位置付けについて高橋氏から説明された。その後、授業の目的と方法について三橋氏より説明された。次いで、実際の授業の中で「専門領域の紹介」や「3・4年次の演習の紹介」がどのように行われたかについて担当教員の一部（清水・小幡・穂積・江尻）により紹介された。さらに、今回の授業の前後で、学生の読み書き能力や、専門領域に対する興味関心がどのように変化したのかが、三橋氏より具体的なデータをもとに説明された。
- ・ 以上の話題提供を受け、全体ディスカッションを行った。その際に議論されたこととして、例えば「文章の書き方」に関しては、基礎演習のなかで「最終的にどの程度の到達度を求めるのか」や、「書き方の『How to』も重要だが、『何を書くのか』の指導も重要ではないか」などが話し合われた。また、基礎演習 B に続く 3、4 年の演習において「どこまで専門性を深められるのか」に関しても様々な意見が交わされた。

【本 FD の振り返り】

- ・ FD 終了後に、参加者に今回の FD への感想および、今後の「教育基礎演習 B」の授業改善に向けての意見を求めた（Forms を用いたアンケートによる）。以下はそのアンケート結果の抜粋である。
- ・ 自分の専門以外のゼミでどんなことをされているのかわかって興味深かったです。

- ・ 先生方が、学生教育に真剣に取り組んでいらっしゃる感じが伝わって、良い時間を持てました。
- ・ 本学の授業「何を伝えたらよいか」「何が伝わるのか」という根本的な問いに対する答えですが、4年間の大学生活での学びを通して、学生が自分なりの人生を選んでいく起点・拠り所が出来ればよいと思ってゼミをしています。スキルの言い方をすれば、自分の関心のある文章（データ）にアクセスし、読みこなし、得たものをアウトプットする練習がゼミでできればよいのではないかと考えます。また、少人数（教師・同級生との蜜な人間関係の中で）特定の分野に深く関わる中で、「読む力」「書く力」すなわち、自分と向き合う姿勢が育てられるなら、「情報」の洪水の中で流されずに生きていく力を育てることができるのではないかと考えます。これからの時代に、流されずに自分を持して生きていくために溢れる情報と対峙する力の土台を築くことが、ゼミの教育目標ではないかと思います。
- ・ 今回のテーマである基礎演習の成立過程が丁寧に掘り下げられていて、この授業の意義を改めて理解することができました。また、ゼミご担当の先生方によるご発表も非常に興味深く、本学科の学問的な広さや深さを知ることができました。学生を引き付けるポイントはどこか、何に学生が興味を持ったのか、といった点にも触れられて参考になりました。他学科の先生方からのご質問やご意見があったことで、より内容に深みがあったと思います。
- ・ 今回のFDで授業の内容や運営などを説明していただき、授業に対する先生方の考え方が理解できました。受講した学生にとっても、3年次の演習につながる効果のある授業になったのではないかと思います。
- ・ 授業に関しては、先生方のご尽力で、学生に対して研究の話をするという、これまでにない機会を作っていただき、学生だけでなく、教員の身としても学びになりました。また、今回のFDでは、他の教員のプレゼンの内容や取り組みを知り、私も来年度はもっとちゃんと説明しようと身が引き締まる思いでした。
- ・ （以下は他学科から参加した教員より）
- ・ 学科の統率が取れていることが印象的でした。カリキュラム全体で基礎教育が補完され、ゼミ等での専門に繋げるという理想とそこへ向けての意志を感じました。このような動きが大学全体に波及することを期待しています。
- ・ 義務教育と就学前教育の多様さを知ることができ、単純に「私も学びたい」と思いました。こんな毎日が続く学生たちをうらやましく感じます。
- ・ 学科の基礎演習とゼミをつなげる取り組みが良いと思いました。学科が違っても同じような悩みがあることが分かりました。本学科でも同様な取り組みを考えたいですが、1, 2年次の演習授業に組み込むのは現在の内容では難しく、どうすれば良いか悩みます。また、文章の読解力、自分の考えを述べる力の向上に向けての内容は他学科でも知りたい内容と思うので、詳細を知る機会があれば良いと思います。

【まとめにかえて】

上記の FD 参加者からのコメントを見ると、今回の FD が有意義なものであったこと、また、今年度スタートした「教育基礎演習 B」の実践についても、いくつか課題はあるものの、高い評価が寄せられていることがわかる。

今後も、本 FD での議論をふまえ、本授業をさらに充実させるべく試行錯誤を重ねていきたい。また、こうした授業の実践の振り返りの場や、他学科の教員も含めた議論の場を今後も積極的に設けていきたいと考える。

報告：江尻桂子・三橋翔太（児童教育学科）

【文化交流学科】

【概要】

日時：2023 年 11 月 21 日 15 時 00 分～16 時 30 分

場所：茨城キリスト教大学 1 号館 1201 教室

内容：「コロナ後の海外リスクマネジメントセミナー」

【講演者／情報提供】（実際の講演者は名前の前に◎を付けた）

◎城戸克斉氏（ジェイアイ傷害火災保険株式会社 DX 推進部 DX 推進課リスクソリューションズ担当マネージャー）

◎志賀敦宣氏（ジェイアイ傷害火災保険株式会社東日本サービスセンター、オペレーションサービス課長）

伊藤悠貴氏（ジェイアイ傷害火災保険株式会社東日本サービスセンター、オペレーションサービス課東日本営業チーム）

中澤俊彦氏（JTB 水戸支店支店長代理）

宮内優真氏（JTB 水戸支店教育営業課）

【大学側の参加者】

文化交流学科の教員 12 名

【当日の報告、並びに講評・展望】

文化交流学科において、国外・国内を問わず、学生を学外に引率して、訪問先で様々な経験をさせることは、教育上極めて重要な位置を占めています。ところが、今般のコロナ禍以後、これが極めて厳しい状況に追い込まれていることは言うまでもありません。

ようやく、コロナ禍も収まりつつある現在、学科では学外引率の授業が再スタートを切りつつありますが、まだ完全にコロナ禍が終息していない状況下、またコロナ禍以後、新たに生じた事態もあります（円安や観光地の変容等）。それらを踏まえ、安全かつ有意義な学外

授業を行うにはどのようなことに留意すべきか。旅行会社で日々、そうした学生・生徒たちへのサービスを行っている方々をお招きして勉強会を設けました。

まず、学科主任の志賀市子先生からの概要と講評を掲載いたします。

////////////////////////////////////

今年度は新型コロナウイルス感染症のワクチン普及に伴い、日本も含めた各国で海外渡航制限が緩和され、本学でも学生の海外留学や教員引率による海外研修が再開した。だが、コロナ禍以降の学生の海外研修をとりまく環境は、以前とは様変わりし、海外渡航に伴うリスクも変化してきている。そこで2023年のFDでは、JTB水戸支店とJTB関連会社のジェイアイ傷害火災保険の担当者をお招きし、コロナ後の海外留学、研修のリスクについて講演していただくことにした。

最初の講演は「海外留学のリスクについて」というタイトルで、主として新型コロナウイルス発生前後の保険金請求状況の変化や感染症以外の海外渡航に関わるさまざまなリスクについて報告された。コロナ禍以前の2019年と以後の2021年では、保険金請求に占める治療・救済費用の割合が47.8%から92.1%に上昇しており、渡航後、新型コロナウイルス感染症に感染したことで、治療費、入院費や滞在費がかさむケースが増えている。新型コロナウイルス感染症の感染症法上の扱いが5類に移行しても、流行が収束したわけではなく、またインフルエンザの流行も各地で報告されている。また感染症以外のリスクでは、ヘイトクライムの増加が指摘され、その他従来から見られるスリ、ひったくり、怪我、病気などのリスクや現地で麻薬犯罪や自然災害に巻き込まれるケースが紹介された。

海外留学、研修の事前準備、指導については、従来から指摘されていることではあるが、飲料水や食べ物への注意、テロ対策などの安全対策の他、危機事象発生時の対応についての提言があった。たとえば、X（旧ツイッター）などSNSでの連絡は意図した内容が伝わらなかったり、あらぬ誤解が生じたりすることがあるため、どこにも連絡がとれない場合の最終手段とすべきであるという指摘もあった。

二つめの講演「海外旅行保険について」では、近年は治療・救済費用が300万円以上に上るような高額な事故事例が増加しており、海外旅行に出かける学生を守るために、海外旅行保険の加入が必須であることを強調していた。JTB傘下のジェイアイ傷害火災保険株式会社では、海外36都市に「Jiデスク」を設置し、海外の提携アシスタント会社が医療アシスタントサービスを提供している。学生がこのサービスを受けるには、所属する教育機関単位でJTBの海外旅行保険に加入することが望ましいとする提言があった。

学生の海外留学や研修はコロナ禍以前からリスクなものであることは指摘されていたにもかかわらず、これまであまり真剣にとりあげられてこなかったのは、たまたまこれまで大きな事故が何もなくあったからに過ぎない。だがひとたび何か事故が発生した場合、たとえそれが一人の学生であったとしても、引率教員だけでは対応しきれず、大学全体を巻き込んだ大きなスキャンダルになりかねないことは自明のことである。講演後の質疑応答やディ

スカッションを通して、海外引率のリスクとその対応に関して教員の意識がより一層高まったことは、本 FD の一つの成果と言えよう。

文化交流学科では、来年度韓国での文化交流体験やインドネシアでの日本語教師実習が計画されており、学生の海外研修に伴うリスクと教員がそれに対応していくかという問題は喫緊の課題である。今後、本学の学生が海外で医療アシスタントサービスを受けられるようになるには、大学単位で旅行保険会社と契約を結ぶ必要があり、そこに至るには各方面での議論が必須となる。個人的には、本学が提供する海外留学や研修に保護者が安心して子供を託すことができるという点で、検討する価値はあるという感想を持った。

(2024 年 1 月 22 日、文化交流学科主任、志賀市子)

////////////////////////////////////

研修会の当日に、旅行会社側から講述され、その場で本学科の教員ともども議論された内容については、志賀先生の文章に尽きているように思われますが、屋上屋を架すことを承知で、私なりの印象を述べたく存じます。

今回の FD で私がもっとも重視したのは、学生と SNS の関係です。昨今もマスコミ上で騒がれているように、中高生や大学生間での SNS をめぐるやり取りの問題は日に日に拡大しているように思われます。まだ日本においては比較的小さい問題に留まっていますが、米国の SNS 大手 5 社の CEO と SNS による被害者家族との厳しい対立（米議会公聴会、2024 年 1 月 31 日）は、近い将来の日本でも起きかねない要素を多分に持っていると考えられます。

とくに、学生が海外へ渡航し、そこで起きる様々な交流やそこでの出来事を SNS に流した場合、思わぬ事態が出来る恐れが生じます。むしろ、その事態には好事も含まれましょうが、そうでない事態が発生した時に、教員側、大学側としてどう対処するか、事前に十分検討しておく必要があります。当然、渡航前の学生への教育が必要不可欠になってきます。そのための教員側の研鑽も重要となりましょう。

ところが本学では、コロナ禍の一応の収束を見て、オンライン授業が教室での授業に戻りました。それ自体は喜ばしいことですが、オンライン授業で学んだ知見や経験が、その後に生かされないケース、すなわち大学全体のデジタル化への認識力低下も見受けられます。たとえばオンライン授業では、授業中の資料や写真等（友人の画像を含む）が授業外に流出する問題が、全国の大学で多発したわけですが、そうした問題を回避するための技術的開発や、学生自身の倫理性の向上が求められ、一定の成果や認識を生んだとも考えられます。しかし、それらはコロナ禍以後生かされることなく、そのままになっているように見受けられます。

渡航先の問題は日常での延長でもありますので、そうした問題を改善しつつ、この SNS 問題に対処することが今後、学科を中心にして求められるように思います。（なお、志賀先生の文章は 2023 年度の「アクティブラーニング報告書」にも FD 概要と共に載る予定です）

報告：染谷智幸（文化交流学科）

生活科学研究科

【生活科学研究科（食物健康科学専攻）】

日時：2024 年 3 月 5 日（火）10：50～12：20

場所：6 号館 6202 教室

参加者：専任教員 9 名（1 名欠席）＋看護学科専任教員 2 名、大学院生 1 名

テーマ：地域医療と在宅医療

演者：千葉大学医学部附属病院 患者支援部 部長・特任准教授 竹内 公一 殿

実施内容：

対面での講義形式で行った。最近の地域医療と在宅医療の変革について、医療提供の最適化のために大学病院で行われている入退院支援やデジタル化による医療連携等、コロナ対策も含め、お話を伺った。

まとめ：

普段の業務では触れることのない分野であるが、本専攻科の教育内容の向上に大切な情報を多く得ることができた。先生の講話は良い刺激となり、教員自身の研究においても、大変ためになった。ICT を活用した栄養教育のあり方について、健康情報をデジタル化することにより、遠隔教育が可能となること、対象者が使用しやすい ICT ツールを選択することにより、個々に寄り添った栄養教育が可能となることを伺い、本専攻科ができる地域貢献の将来構想を検討するうえで、貴重かつ有意義な研修となった。

報告：桐井 恭子（食物健康科学科）

生活科学部

【心理福祉学科】【生活科学研究科（心理学専攻）】

開催日時：2 月 20 日（火）10:00～12:00

開催場所：6 号館 6301 教室

出席者数：12 名（学科教員 14 名）

1. 目的

学科・大学院の実習全般の現状についての情報共有と意見交換

2. 内容

学科・専攻で実施している各実習について

①実習担当者による実習内容の報告

②①についての意見交換

<実習一覧>

- ・ソーシャルワーク実習Ⅰ
- ・ソーシャルワーク実習Ⅱ
- ・心理実習（学部実習）
- ・心理実践実習（大学院実習）

3. 概要と今後の課題

「心理実習」「心理実践実習」「ソーシャルワーク実習Ⅰ・Ⅱ」の順に、各実習担当者が中心となって実習内容を報告した。その後、報告内容への参加者からの質問とそれへの回答を柱として、活発な情報共有と意見交換が行われた。

実習教育に関しては、心理系実習は、実習指導者講習会の受講をはじめ、実習教育構築の初期段階にある。限られた時間と人的資源を十分に生かした実習教育を実現すべく、可能な合理化を推し進めるとともに、「心理演習」「心理実習」「心理実践実習」の有機的に関連づけるカリキュラムの設計が課題であることを共有した。福祉系実習は、実績の蓄積と法の整備のもと展開されている。そうした実習のプログラムや成果に関する情報が共有された。そのうえで、実習先での実習評価をはじめ、実習内容に関する調整と整理が今後の課題であることが共有された。

報告：櫻井由美子（心理福祉学科）

山川 誠司（生活科学研究科心理学専攻）

【食物健康科学科】（専任教員 16 名）

日時：2024 年 3 月 6 日（水）13 時 00 分～15 時 40 分

場所：7 号館 7101 室

出席者：専任教員 14 名

○実施目的：

2025 年度より新カリキュラムが開始となるにあたり、様々な授業形態・内容の変更が予定されている。新たに追加された授業や、複数担当者がいる科目で調整が必要な項目もあることから、関連する分野の先生内でグループとなり、今後の授業内容・教育内容について議論し、2025 年度からのスムーズな授業展開を行うことを目的とする。

○実施形態：

第1部と第2部でグループを変更し、以下のテーマ（科目）についてグループごとに話し合った。

【人体の構造と機能及び疾病の成り立ち＋基礎栄養】、【食べ物と健康】、【応用栄養・栄養教育】、【臨地実習＋統計処理】、【臨床栄養】、【基礎演習】

○分野別討議

【人体の構造と機能及び疾病の成り立ち＋基礎栄養】

1. 解剖生理学実験ⅠおよびⅡの授業内容検討…（現行15回のところ、12回×2（Ⅰ、Ⅱ）となるため、内容を増やす。後に続く授業のきっかけとする授業内容とする。

〔今後の課題〕

- ・新たに着任する教員(医師)と相談・調整要
- ・授業の内容・順序性は今後更に検討を進めていく

【食べ物と健康】

1. 実験の内容精査（15→12回）
2. モデルコアカリキュラム細項目…ほぼ網羅されていることを確認した。
3. 食品学Ⅰ、食品学Ⅱの内容精査…担当者間で確認した。

〔今後の課題〕

- ・調理学実習と調理学実験の内容精査：今後、担当者間で話し合いが必要
- ・食品衛生学実験の内容精査：新任先生と現担当の先生で検討要

【応用栄養・栄養教育】

1. 実習の内容精査…精査できていることを確認した。
2. モデルコアカリキュラム細項目…網羅していることを確認した。
3. 障害児・障がい者の講義…栄養教育論で担当。

〔今後の課題〕

- ・病態の栄養指導はどの授業で行うか検討要

【臨地実習＋統計処理】

1. 学外臨地実習の内容の確認…今後履修モデルの作成、実習間の調整等を行う。
2. 総合演習Ⅰ・Ⅱ内容の検討…事前事後指導の内容の精査。
栄養統計処理との関連の確認…臨地実習に必要な知識・技能は網羅されていることを確認。

〔今後の課題〕

- ・実習のスケジュール臨地実習Ⅰ～Ⅴ実習期間が重複するため調整を要する。
- ・給食実習における事前指導のタイミング

- ・総合演習Ⅰ、Ⅱの内容の精査が必要

【臨床栄養】

1. 臨床栄養Ⅰ～Ⅳの内容精査…担当を確認した。
2. 臨床栄養学実習と応用臨床栄養学実習の内容精査…内容を確認した。
3. モデルコアカリキュラム細項目…網羅できていることを確認した。

【基礎演習】

1. 「基礎演習」授業の目的の確認…食物健康科学科で必要となる基礎学力、基礎知識を身につける。
2. 授業方式について…従来通り1クラス1教員担当制。授業資料を共通にし、授業内容を標準化し、学生の学びに違いが生まれないように工夫する。

〔今後の課題〕

- ・授業内容の精査と標準化

まとめ：

全ての分野において、厚生労働省から示された「管理栄養士・栄養士養成のための栄養学教育モデル・コア・カリキュラム」に記載されている事項を網羅することを確認した。授業回数が減少する実験・実習については、内容の濃い授業を展開すること、回数が増える実験については、今までの実験に加えて、新たな手技・趣向の実験を加えること、より丁寧な実験を行うことを確認した。臨地実習は給食・臨床・公衆栄養分野で選択制となるため、その組み合わせによる注意事項、実習期間・実習人数等の調整が必要なことを確認した。分野毎の今後の課題や、授業の詳細についてはさらに議論を深めていく必要がある。

報告：桐井 恭子（食物健康科学科）

看護学研究科

1 第1回「対話的に看護観を語り合う」

1) 趣旨

2021年度には「成人学習者としての成長を支える研究指導－RQの洗練に向けて－」、2022年度には「リフレクションからアクション・リサーチへ」というテーマのもと、成人学習論の研究者である三輪建二氏を迎え、研究指導について学んできた。いずれの回においても、研究指導をめぐる問題の解決には、教員の根底にある看護観を問う必要があると学んだ（三輪，2023）。氏は迷うことなく「看護観は暗黙知である」と述べた。看護観は暗黙知だったのである。

看護論が次々に発表された1980年代に看護に携わった教員は減少するのみである。最近

の看護観に関する研究を確認すると、学生の看護観の変化は数多く報告されていたが、教員やベテラン看護師の看護観を採り上げた報告はみられなかった。教員にとっても、学生にとっても、本当に看護観が暗黙知になっている可能性がある。

一方、2022 年度研究科 FD のアンケート結果から、参加者は①研究指導における「対話」の重要性、②根底にある信念をくぐらせ、問題解決に臨む姿勢、を学んだことがわかった。看護観に関する課題を示す②より、教員は①の「対話」を望んでいる可能性がある。Y. セイックラは「対話」性の核心は他者性、すなわち「平等でありながら、互いに異質な存在」であり、互いに相容れない関係にあることを認識することであると説明した。患者の生命をめぐり一刻を争う臨床では、患者の生命の消耗を最少にするという原理に則り、まずは同一の看護が求められる。しかし専門分化した看護学の研究指導においては、むしろユニークさが求められる。ゆえに研究指導においては、対話を通し、教員間、また学生－教員間でお互いの看護観を認め合うような機会が求められているのではないかと考えた。

そこで、お互いの看護観の一部（看護において大切にしてきたこと）を対話的に共有し、お互いの違いを認める FD を開催し、教員集団に多声性が生まれ、研究指導への意識が変化することに期待した。

2) 日時： 2023 年 6 月 12 日（火）14：30～16：00

3) 会場： 8 号館 4 階実習室

4) 参加者：本学教員 21 名（研究科教員 8 名、学部教員 13 名）

5) 内容

タイムスケジュールは表に示した通りであった。

時刻	内容	
14：30～	趣旨説明	松永
14：40～	「看護において大切にしてきたこと」についての話し合い	グループ
15：50～	アンケートへの回答（できるだけ当日中に Forms に提出）	各研究室

趣旨説明の際には、スライドで、Y. セイックラ（2019）から「対話」を具体的に説明した文を引用した。4 人グループで実施し、終了時刻になったら解散するよう指示した。

＜本 FD による「対話」＞趣旨説明で使用したスライドより

- ・ 技術ではなく態度、心のありよう
- ・ 主観的に語る「私は・・・」
- ・ 自分とは異なる「他者」の看護観に気づく
「他者＝私の理解を超えた存在」
- ・ 自分と異なる他者の看護観に関心を持ち続ける
- ・ 発言をさえぎらない
- ・ 単に肯定するのではない
- ・ 反対語：心配、戦略、介入、コントロール

6) 成果

出席者が多く、興味の高さがうかがえた。また、「対話」的行動を具体的に示したことにより、話しやすい雰囲気が作られ、終了時刻になっても継続するグループがみられた。

アンケートの集計結果からは、概ね目的を達することができたと評価している。

ご自身の看護観を語れましたか。	4.8
他の教員の看護観に共感できましたか。	4.8
ご自身とは異なる他の教員の看護観に気づきましたか。	4.9
ご自身とは異なる他の教員の看護観に関心を持ちましたか。	4.9
他の人の発言をさえぎらずに聞くことができましたか。	4.7

自由記述には豊かな表現がみられたが、かなり省略して示す。

◎ 看護観に関する内容

異なる看護観を知った（４）、看護観は変化していく、
看護観が教育観につながっている。

◎ 対話に関する内容

思いを共有した（３）、対話に励まされた、
語る・聴くことの意味を考えた、自分の思いに気づいた

◎ その他

患者の多様性にも学んだ、学生への関わりも大切にしたい。 等

<文献>

三輪建二（2023）：わかりやすい省察的実践 実践・学び・研究をつなぐために、医学書院

Y. セイックラ（2019）：開かれた対話と未来 今この瞬間に他者を思いやる、医学書院

2 第2回「テーマティック・アナリシス法」

1) 趣旨

看護学における研究方法として、質的分析法は多く採用されている。しかし、研究法の背景への理解なく採用したり、コード化やカテゴリー化や解釈の過程が不透明だったりして、論旨一貫性を評価しづらい研究も少なくない。

そこで、分析の厳密性を担保した分析法として、海外では一般的になっているものの、和訳本がまだ1冊しか出版されていない研究法について知り、解釈を排した「厳密な分析」を体験したいと考えた。

2) 日時：2024年3月8日（木）15～17時

3) 会場：8号館8102教室

4) 講師：武蔵野大学看護学研究所客員研究員 土屋 雅子 氏

5) 参加者：32名（本学教員 27名、研究科学生3名、地域の看護職者2名）

6) 内容

参加者には事前課題「土屋他（2019）小児期，AYA期発症がん経験者の初めての就職活動における病気開示の意思決定への影響要因と採用面接担当者の反応，日本小児血液・がん学

会雑誌 56 (2), 189-197」を指示した。著者であり講師である土屋氏には、本論文にはカテゴリとサブカテゴリとインタビューデータしか示されていないので、参加者が分析の過程を理解できるよう、コーディングの過程を示してほしいと依頼した。

講演の前半には本研究方法の歴史、開発者の学問背景、海外における評価、本研究法の強みや用語の定義等の説明の後、質疑応答を行った。後半には、「発話は長く、句点がないため1文単位の分析は難しく、文を切れれば解釈が入ってしまう」ことを理由に、「1行」というコーディングユニットによる分析の実際について、事前課題論文に掲載されたインタビューデータ2文を用い、コーディングブックを示しながら説明を受け、質疑応答を行った。

7) 成果

本研究法のみならず、質的研究全般にわたる質問が多かった。多くの論文を発表している土屋氏は、質的研究の難しさに共感しながら、自身の経験を例に回答してくださったため、本研究法を理解しようという意欲が高まっていくように感じた。

前半には他の分析方法との差別化が難しいと感じていたが、後半になると具体的なデータが分析されていく様子がみえ、「厳密さ」が示す意味や、論理展開がわかりやすい論文を執筆するために定義（テーマ）が必要であるという意味を納得するに至った。

アンケート結果から、ある程度の成果を得られたと判断している。

テーマティック・アナリシス法について理解できましたか。	4.5
研究手法を学ぶ機会として有効でしたか。	5.0
研究や研究指導への意識が高まりましたか。	4.9
講演内容は適切でしたか。	5.0
講師は適切でしたか。	5.0
開催時期は適切でしたか。	4.7
講演時間は適切でしたか。	5.0

自由記述をかなり要約して示す。後半の具体例の説明が効果的であったと評価できる。

◎具体例がありわかりやすかった（4）

◎わかりやすかった（4）

◎参考になった（2）

◎その他

RQを洗練させる必要がある 等

3 今後のFDの方向性

3年間にわたり研究指導力の向上を狙ったFDを実施したことにより、研究目的を絞り込んだ修士論文が提出されるようになった。また、修士論文・課題研究発表会において、他の分野の発表に対する質問が増えたことから、看護観に着目した対話によるFDからもある程度の成果を生み出しているように感じている。

アンケートからは、数年前から学部の研究方法論演習において、文献研究を主とするとい

う変更がなされたことから、文献研究に関するFDが求められていることがわかった。文献研究に関する指南書はまだ少なく、適切な講師の選択が難しいことが予想される。まずは、文献研究の指導における課題を抽出することが先決であろう。

また、本研究科は未だ副査制をとっていないという課題も残っている。認証評価の年度を目前にし、喫緊の課題といえよう。看護学研究科の教員の学問背景は看護学のみならず、医学、経済学、教育学等幅広く、副査制あるいは副査制のよさを体験したことがない教員の存在も否定できない。副査制が学生の利益として許容されていくには、教員が副査制の利点を知る必要があり、さらなる研修計画が求められる。

報告：松永 恵（看護学研究科）

看護学部

【看護学科】

1. テーマ

卒業生と連携した看護基礎教育の実践に向けて

2. 趣旨

昨年度(2022年度)のFD研修会は、「看護基礎教育における卒業生との連携において」をテーマに、先駆的な取り組みを実施している大学からの報告(講演)と、学科教員のディスカッション(グループワーク)を行い、卒業生との連携教育の実践におけた方策について検討した。今年度は、その実現に向けたより具体的な計画を教員間で検討する機会とした。

研修会では、まず、昨年度の内容を受け、委員会では卒業生を対象にアンケート調査を実施したので、その結果(就業状況や大学への支援ニーズ等)を報告する。また、卒業生と連携した教育について、今年度の実践状況を報告していただく。これらの報告から、各領域(科目)、各委員会等でどのような卒業生との連携の場が考えられるか(必要か)、その実践のために必要な準備(計画)や課題等をグループワークで検討し、全体で共有する。

3. 目的

卒業生と連携した教育を実践するための、具体的な方策を検討する。

4. 研修会の概要

1) 日時 2023年12月23日(土) 13:30~15:30

2) 場所 8201 教室

3) 参加者 看護学科教員 26名

4) プログラム

時間	内容
----	----

13:30	開会のあいさつ 学部長 栗原 加代 先生
13:35～13:55 (20分)	1. 卒業生へのアンケート調査結果について
13:55～14:20 (25分)	2. 卒業生と連携した教育の実践状況の紹介(2023年度) 1) 地域・在宅看護学実習Ⅰ：前田先生 2) 看護実践統合演習Ⅰ：中村先生 3) 国家試験対策委員会：眞崎先生
14:20～15:00(40分)	3. グループワーク(領域) 卒業生との連携教育の実践において
15:00～15:25 (25分)	4. 検討内容の発表、共有
15:30	閉会のあいさつ 学科主任 白木 裕子 先生

5. プログラム内容の概要

1) 卒業生へのアンケート調査結果について：卒業生を対象としたアンケートを検討し、実施した。

- (1) 調査目的：卒業生の就業状況や大学への要望を明らかにし、キャリア形成支援、卒業生と連携した教育について検討する
- (2) 調査対象者：看護学科卒業生 第1～16回生1,346名のうち同窓会名簿登録者1,014名
- (3) アンケート回答者：181名 回収率：17.9%
- (4) 調査内容：①卒業時の状況 ②現在の就業状況 ③卒業時からの就業継続状況
④自己成長 ⑤自己研鑽およびキャリアアップ ⑥離職の状況
⑦本学の教育への評価 ⑧本学への要望および協力 ⑨本学への要望

(5) 調査結果：省略

(6) 調査からみえてきた課題

①キャリア形成への課題

卒業生の多くが、看護職・養護教諭としてのやりがいを感じながら就業し、日々の業務と並行して、自己研鑽、キャリアアップにつながる行動を図り、自身の将来像の明確化につながっている。一方で、

- ・コアコンピテンシーⅥ群の専門職として研鑽し続けるが低い、
- ・CPの主体的に学修に取り組み、生涯にわたって自己研鑽し続ける力が低い、
- ・本学でもっと学びたかった内容にキャリア教育をあげている、
- ・本学に期待する支援として研修会、講義の聴講、キャリア支援を希望している。

学生時代に、看護職としての自身のキャリアや将来をイメージさせる学修や、卒後、学びたい、キャリアアップしたい、相談したいと感じている卒業生への支援を検討していくことが課題ではないか。

②現行の教育への課題

- ・もっと学びたかった内容は看護に関する技術/知識(特に技術)が多く、
 - ・CPの論理的思考力と柔軟な創造力が低い
 - ・コアコンピテンシーⅣ・Ⅴ・Ⅵ群が低い
- という現状の結果を、現行の教育内容にどのようにフィードバックしていくのかということも各領域、学科として課題になるのではないか。

③卒業生とのつながり

本調査を通して、卒業生でありながらも大学として繋がる手段を構築していないことを実感した。教育への協力の意向がある学生はありがたいことに多くいるが、学科として卒業生と繋がる、情報提供するシステムを構築していくことが喫緊の課題ではないか。また、卒業後の経過を把握することも大切ではないか。卒業後の繋がりは、結果的にキャリア支援にもつながると考える。

2) 卒業生と連携した教育の実践状況の紹介(2023 年度)

(1) 地域・在宅看護学実習Ⅰ：前田先生

①卒業生の具体的な役割

→ライフステージ：成人期（子育て中）の対象として、大学に来校してもらい、学生から「暮らしと健康」についてインタビューを受けてもらった。

②実施に向けた計画や準備

科目責任者の元ゼミ生で、保育園児の母親である情報を得ていた（科学的思考基礎演習Ⅵでも協力）。メールで連絡を取り、実習の概要を説明し協力の同意を得た。その際に新カリキュラムについての説明を行い、卒業生の時のカリキュラムとの比較をして、実習の位置づけをイメージしてもらった。

③実施後の学生や卒業生の感想

<学生>

・話し易いように気を遣ってくれ向こうから言葉をかけて、緊張をほぐしてくれたので、インタビューがしやすかった。準備した質問だけでなく、会話の中から話題が広がって、計画していたよりたくさんの情報を得ることができた。

<卒業生>

・自分たちの時は、早期看護体験実習が初めての实習だった。今のカリキュラムについて興味を持ち、病院からの実習でなく、生活者として対象を知るということは、大切であると感じた。緊張が伝わってきたので、できるだけ硬くならず話ができるようにとは心がけたが、自分も結構緊張したし、こんな答えて良いのかと戸惑い考えながら答えた。

④連携の継続に向けた今後の課題

毎年、卒業時に同窓会役員を決めているが、機能していない状態であるため、今後は連携教育に協力してもらうことを前提に、卒業時に説明を行うと良いのではないかと考える。

(2) 看護実践統合演習Ⅰ：中村先生

①卒業生の具体的な役割

シミュレーション演習の模擬患者

課題1：成人期の患者のバイタルサインの観察（呼吸）

課題2：高齢者の患者の車いす移乗

②実施に向けた計画や準備

6月：水戸協同病院への実習打ち合わせに同行し、看護部長に卒業生に模擬患者として演習に協力していただけるかを打診→協力可能とのお返事をいただく。

9月：演習日程を教育担当看護師長に連絡し、各演習日に3名の卒業生を派遣していただくように勤務調整をしていただく。→調整可能とのお返事と公文書を依

頼された。

- ・病院長と看護部長に公文書を発送

10月：協力していただく卒業生名簿をメールでいただく。

- ・模擬患者の役割の説明文書、講義資料、演習での具体的な役割の文書を各卒業生に配布

＊10月18日2・3限（課題1）・25日2・3限（課題2）に各3名協力いただいた。

（説明や準備・振り返りを含めて9時～15時の拘束時間）

③実施後の学生や卒業生の感想

＜学生＞リアクションペーパーより一部抜粋

- ・測定数値だけではなく、随伴症状を観察したり、医療用語をわかりやすい言葉に置き換えて尋ねたりしながら状態を観察することが大切だと学びました。症状や疾患に合わせてどのような随伴症状があり、何を観察すべきかの知識を身につけて、実践できる力をつける必要があると考えました。
- ・緊張で自分が何を言っているのかわからなくなってしまって、その緊張が模擬患者さんに伝わってもっと不安にさせてしまったと反省しました。また、手の視診をするときに手を添える、目的・理由はやる前に説明するなどアドバイスをいただきました。また、関わる時間が限られている中でより正確で多くの情報を引き出せるように、どのように質問をするか考えておく必要があると考えたため、あらゆる患者さんを想定して会話パターンを作ることが課題です。

＜卒業生＞

- ・学生たちが真剣に演習に取り組んでいて感心した。学生にフィードバックすることで、自分自身が看護師として心がけていることが改めてわかった。機会があったら、またご協力したい。
- ・学生へのコメントがこれでいいのか悩みながら話した。演習に参加し自分の学びにもなった。

④連携の継続に向けた今後の課題

- ・依頼前に授業日程と内容を決定しておく。
- ・模擬患者への交通費・謝金などの予算

（3）国家試験対策委員会：眞崎先生

①卒業生の具体的な役割

国家試験に臨む4年次生への講演（実体験をもとに）

- ・これからの時期の勉強法 ・冬休みの過ごし方 ・国家試験への臨み方
- ・国家試験に臨む4年次生の質問への回答（実体験をもとに）

②実施に向けた計画や準備（一部抜粋）

- ・人選：在学中の学修状況や模試の成績、コミュニケーション能力、資格取得状況、勤務先
- ・人選した卒業生および勤務先（看護局）への打診
- ・公文書の作成（院長・総看護師長・本人宛て）と送付

③実施後の学生や卒業生の感想(一部抜粋)

<学生>

【良かった点・効果的だった点】

- ・先輩方の具体的な勉強法など教えていただいたことでまだまだ頑張らなくちゃと思えた。
- ・この時期の過ごし方について改めて見直す機会ができた。冬休み中の過ごし方がわかった。
- ・当日の雰囲気や持参物、注意した方が良いことを体験を踏まえて聞いたことが良かった。

【改善してほしい点】

- ・開催時期：後期が始まってすぐ、11月頃、卒業研究のメ切直後がよかった。
- ・学修方法：実際に使用していたノートや参考書を見せて欲しかったです。
- ・人選：もう少し点数がギリギリだった人の話を聞きたかった。

<卒業生>

【講演や質疑応答を終えて】

- ・卒業して以来、大学に来ることができて、学生や先生に迎えてもらえて、嬉しかった。
- ・頑張った学生時代の自分を思い出し、初心に返ることができた。
- ・これからの自分について考えることができ、視野が広がった。

【事前準備や当日の運営に関して】

- ・事前に質問事項などが提示されていたので、安心して当日を迎えられた。
- ・早いうちに(3年次生から)このような機会があるとよいのではないかな。

④連携の継続に向けた今後の課題

- ・人選の検討 ・開催時期の検討 ・進め方や時間配分の検討
- ・早めの準備(卒業生の準備期間の確保)
- ・本講座の意味づけ(事前説明・事後フォローの充実)

3) グループワーク：卒業生との連携教育の実践にむけて

別紙にて報告

6. 実施後アンケート結果 回答者数：11名 一部抜粋

1)「卒業生へのアンケート調査結果について」「卒業生と連携した教育の実践状況の紹介」について

- ・アンケート結果、とても参考になりました。回答してくれる卒業生ですのでそれなりの意識がある人だと思いますので偏りは否めませんが、このような試みをしたことがなかったもので、色々と課題が見えたように思えます。今後は、インタビューなどで具体的な意見も聞いてみたいと思いました。
- ・キャリア教育に関して、学部卒業時にある程度考えられるように教育しておくべきだと思った。民間企業に就職する学部では、現在をみつめ、将来を望むような教育が行われている。看護師になることは決まっていますが「どのような看護をしたいのか」ということを考えさせていく必要があると思った。私たちがキャリア教育を学ぶ必要があると思った。

- ・ 本学において実際にどのような連携を行っているのかについて知る良い機会となった。また、統計的に卒業生が現在抱える問題や要望なども示していただき、わかりやすかった。
 - ・ 卒業生アンケートの結果がとても興味深く、これからも大学と繋がりたい、という気持ちを知ったとともに、今これだけの人が看護師、保健師等で頑張っていることを知り、励みになりました。
 - ・ 卒業生たちが後輩育成に興味・関心を持っていることに心強いと思いました。卒業後もない場合には、やりがいを感じていないことが分かりました。初めての業務をこなすことで精一杯なのではないかと思いました。また、適応できずに退職する卒業生の話も耳にするので、卒業しても大学とはつながっているということを全卒業生に認識してもらうことが重要だと考えました。
 - ・ アンケートに回答してくれる人が意外と多かったことに驚きました。回答するモチベーションの方々だったので本学の教育にも協力したいと好意的に捉えてくれていると思うので、そういった卒業生を大事にしたいと思いました。しっかり繋がれるようなシステム作り（それこそライングループでも良いですし）が必要かと思いました。
 - ・ 卒業生の状況を把握することができて良かったです。卒業生の動向を知っていることが大学の強みにつながると考えています。また、卒業生と連携した教育の実践状況が具体的にすることができたのは、非常に参考になります。
- 2) グループワーク：卒業生との連携教育の実践にむけてについて
- ・ 他領域の試みを聞き、頂くことや自分の領域でも取り入れられるヒントを頂きました。領域毎であったので委員会等は、委員長などの一意見となってしまった気がしました。しかし、情報共有することによりたくさんアイデアを知ることが出来、刺激を受けました。
 - ・ 様々な連携教育が提案され、興味深かった。看護師の生涯教育につながるような科目を作り、在学生が利益を得るのみならず、参加する卒業生の学びにもなるようなプログラムを練っていくと、費用がいらなくなると思う。
 - ・ 短い時間ではあったが何を検討すべきであったのかが明確であったため、順調に話し合いを進めることができた。また、共有においては、視点が違ったことなど学びも多かった。中でも松永先生のラダーの取入れの話は興味深かった。
 - ・ 各領域での発表を知り、自分たちでは思いつきもしなかった素敵な案をたくさん知ることができました。この機会を設けてくださり、ありがとうございました。領域での講義、演習、実習において、卒業生とどうつないでいくのかを話し合う良い機会となりました。また、他領域のアイデアを共有したことで、新しい視野が広がりました。
 - ・ 領域単位だけでなく、学科全体で卒業生と連携する取り組みが実現できれば素晴らしいと思います。領域や委員会から様々な提案がありましたが、まずはつながる仕組みが必要だと改めて感じました。他領域や委員会からのアイデアはとても勉強になりました。
 - ・ 領域でのグループワークにとどまらず、発表・共有によって他領域のアイデアも参考にできるのは良かったです。
 - ・ 各領域での話し合いは、今後の教育に活躍できると思われた。各領域がいろいろと考えていることが聞けて参考になった。
 - ・ グループワークは、領域で考えることができ、実現可能性があるように思い、楽しかったです。

7. まとめ

昨年度 FD 研修会から継続したテーマで検討したことで、卒業生との連携の必要性の理解の強化と、実施におけた共通理解が図られた機会となった。

まず、卒業生へのアンケート調査からは、卒業生自身のキャリア形成や現行の教育内容への課題が明らかになった。一方で、学科として卒業生と繋がる、情報提供するシステムを構築していくことの必要性も明らかになった。

次に、卒業生と連携した教育の実践状況の紹介では、学生への教育効果や、卒業生が教育内容や学生のレディネスを理解する機会や自身の業務を振り返る機会であること、また、教員が卒業生の成長や社会での活躍を実感できる機会であることの報告があった。このような効果を、さらなる教育機会に拡大していくために次のグループワークでの検討につなげることができた。

そのグループワークでは、各領域や委員会における卒業生との連携について、実施するための具体的な検討ができ、教員全体で共有できた。一方で、授業内容の組み立てや人選、就職先の協力、謝金等の予算などの課題も明らかになった。また、卒業生との連携を教育効果につなげるためには、卒業生と教員間の教育内容の共通理解や卒業生の役割の明確化など、事前の綿密な打合せ、調整が不可欠である。

全体として、卒業生の現状や既に実施している卒業生との連携の情報提供から、各領域、各委員会、学科全体においてどのような取り組みが可能かを検討し、教員間で共有できた有意義な機会であったと評価できる。今後は、次年度からの実施におけた詳細な検討をしていくことになる。また、学科全体として、卒業生の動向を把握するシステムも早急に検討をしていきたい。

報告：若林千津子（看護学部看護学科）

経営学部

テーマ：『プロティアン・キャリアによる人的資本の最大化』

【概要】

講師：有山徹氏（一般社団法人プロティアン・キャリア協会 代表理事、4designs 株式会社代表取締役社長）

日時：3月5日（火）13時－14時

場所：11号館 11305 教室

形式：対面

参加者：16名（他学科・職員5名含む）

【内容】

デジタル化やコロナ禍による働き方や経営環境の変化に適応するには人的資本経営や人的資本の最大化が重要な課題になっている。本研修ではキャリア形成や人的資本最大化において、講師に45分程度レクチャーして頂いた上で質疑応答を行った。

最初の講演は「伝統的キャリア」と「プロティン・キャリア」に関する理論について報告された。伝統的キャリア（組織的キャリア）において重要な態度は組織コミットメントであり、そのアダプタビリティ（変化対応力）は組織で生き残ることである。一方、プロティン・キャリアにおいて重要な態度は仕事の満足感・専門性へのコミット・組織とパートナー関係であり、そのアダプタビリティは自分の市場価値である。プロティアンの語源は変幻自在に姿をかえる神「プロテウス」である。プロティアン・キャリアにおける「キャリア」は結果ではなく、個々人が「何らかの継続経験」を通じて「能力」を蓄積していく「過程」を意味する。従来の伝統的キャリアは1つの組織で昇進するための尺度だったが、現在の若者はキャリアの成否を決めるのは自分であると考えている。すなわち、組織は地面のようなもの個人の求める場を提供する。

キャリアの明確性を高めるのは主体的に学ぶことである。学ぶ個人が増えることは特に新規の有益な情報を必要とする変化の時代においては組織にとって重要となっている。例えば、「学生の場合、自分が看護師になりたい」という目標を明確に持っていれば、そのために必要ことは何かわかる。

【ディスカッション】

- ・プロティアン・キャリアを本学の学生にどのように対応すれば良いか。
- ・地方大学と企業のマッチング
- ・キャリア形成の概念への理解

報告：Yodtomorn Pimprapa（経営学科）